

# 金子みすゞと中原中也のリレー朗読会

## —— 実践報告と今後の可能性・問題点 ——

林 伸 一

### 1. リレー朗読

まず「リレー朗読」と「朗読マラソン」は似たようなイメージがあるため、両者を区別する意味で、次のように操作的に定義しておきたい。

「リレー朗読」は、朗読会の参加者が互いに連携して、指定された朗読テキストを分担して読み、作品の一部または全部を読了する活動である。一人一回とは限らず、数回登壇して読むこともある。

「朗読マラソン」は、朗読会の参加者が各自思い思いの朗読作品を持ち寄り、制限時間内に読み、受付順あるいは抽選などで決められた順番で登壇し読んでいく活動である。参加者の人数にもよるが、制限時間内で、通常一人一回のみの登壇となることが多い。山口市立中央図書館の「中央図書館まつり実行委員会」が主催する「朗読マラソン」は2023年で第4回を数えるが、「小説、童話、エッセイ、新聞コラムなど自分の好きな作品を持ち寄って、5分間、朗読するイベント」としている。ちなみに2023年11月18日の場合、朗読者は15名としている。

次に「リレー朗読会」の実施手順について、一例を示しておきたい。

#### 1-1. 第一段階：朗読会の企画・実施

詩集、エッセイ、絵本などの朗読テキストを決めて、公開の朗読会を企画し、実施する。

参加者に次回のリレー朗読会の案内を告知し、読み手としての参加申し込み（エントリー）を受け付ける。

#### 1-2. 第二段階：練習日の設定

エントリーした参加者向けの練習日を設定する。朗読テキストの難易度にもよるが、2～3回は設定し、できるだけ本番に近づけてリハーサル形式で実施する。特に、初めて朗読に挑戦する人には、不安感を低減するためにも練習日が必要となる。

#### 1-3. 第三段階：リレー朗読会実施

リレー朗読のサイクル型モデルを循環させて実施し、反省会も開くようにする。

エントリーした参加者だけでなく、聞きに来た参加者に対してもアンケートを実施し、次回への改善点を洗い出すようにする。本稿でも、次のような実施例をもとに問題点を検討する。



(2)

- ①金子みすゞのリレー朗読会 『空のかあさま』
- ②中原中也のリレー朗読会 『汚れっちまった悲しみに…』
- ③福田百合子のリレー朗読会 『百合子のふるさと辞典』
- ④金子みすゞのリレー朗読会 『キネマの街』



## 2. 中原中也のリレー朗読会 (2023年4月22日・大殿地域交流センター)

朗読テキストは、『中原中也・汚れっちまった悲しみに…』(石井昭・影絵／福田百合子監修／新日本教育図書1998)を用いた。同書の中に以下に示す「正午・丸ビル風景」という中也の詩が収録されているが、その中の表記をめぐって練習段階で議論となった。それは、「こどもと本のジョイントネット21・山口」のブログを制作している山口智子さんが「大きな」と「大きい」の表記の違いに気づき、疑問を持っていろいろと調べたことがきっかけとなっている。

表1. 「正午・丸ビル風景」(中原中也) 太字筆者

<p>『中原中也・汚れっちまった悲しみに…』(石井昭・影絵／福田百合子監修／新日本教育図書一九九八)より</p>	<p>正午 丸ビル風景</p>	<p>ああ十二時のサイレンだ、サイレンだサイレンだ  ぞろぞろぞろぞろ出てくるわ、出てくるわ出てくるわ  月給取の午休み、ぶらりぶらりと手を振って  あとからあとから出てくるわ、出てくるわ出てくるわ  大きなビルの真ッ黒い、小ツちやな小ツちやな出入口  空はひろびろ薄曇り、薄曇り、埃りも少々立っている  ひよんな眼付で見上げてても、眼を落としても…:  なんのおれが桜かな、桜かな桜かな  ああ十二時のサイレンだ、サイレンだサイレンだ  ぞろぞろぞろぞろ出てくるわ、出てくるわ出てくるわ  大きいビルの真ッ黒い、小ツちやな小ツちやな出入口  空吹く風にサイレンは、響き響きて消えてゆくかな</p>	<p>中原中也</p>
--	---------------------	---	-------------

### 2-1. 「大きなビル」と「大きいビル」の大きな違い(連体詞とイ形容詞)

「正午・丸ビル風景」の現存稿はなく、初出(第一形態)は、『文學界』1937(昭和12)年10月号(第4巻10号)である。5行目と11行目の「大きなビル」は、どちらも同じ連体詞「大きな」と表現されている。また、5行目の「小つちやな小つちやな出入口」は、促音や拗音が小さくなっていない。「大きな」と「小さな」よりもさらに「小つちやな」と音変化させて、対比の度合いを強めている感がある。連体詞間のコントラストの強調表現である。

また「ぶらりぶらりと手を振って」の擬態語「ぶらりぶらり」と濁音（b音）で表現し、やや重い感じを出している。

最終形（第二形態）は『在りし日の歌』創元社1938（昭和13）年4月15日の第二章「永訣の秋」に収録されたものとされている。朗読テキストにした『中原中也・汚れっちまった悲しみに…』（石井昭・影絵／新日本教育図書1998）も『在りし日の歌』（創元社1938）に基づいている。

5行目の「大きなビル」（連体詞）と11行目「大きいビル」（イ形容詞：日本語教育用語）では、品詞が異なっている。

5行目の「小っちゃな小っちゃな出入口」と「真ッ黒い」も促音の「つ」がカタカナ表記され、小さく書かれており、視覚的にも強調されている。

『在りし日の歌』（創元社1938）の11行目では、「大きい」と「小さな>小っちゃな」で「イ形容詞」と「連体詞」による対比の強調となっている。客観的な「大きい」と主観的な「小さな>小っちゃな」との対比を表現していると言ってもいいであろう。

また「ぶらりぶらりと手を振って」の擬態語「ぶらりぶらり」も半濁音（p音）を用いて、第一次形態の「ぶらりぶらり」に比べるとやや軽い感じを表現している。

朗読テキストは、石井昭氏の影絵で、月給取り（サラリーマン）が、蟻の群れとして描かれており、「ぶらりぶらり」が擲擻しているようにも感じられるし、逆にp音の繰り返して、軽快でユーモラスなイメージとも感じられる。ポカポカ陽気（p音）の中の「桜かな」、チャップリン（p音）の演ずる「月給取り」のような連想イメージと呼応しているようにも取れる。

この詩の副題の「丸ビル風景」から「大きなビル」が「丸ビル」を指していると思われる。当時、他に比べようもなく、一番大きい建造物の代名詞となった「丸ビル」を中也が山口の田舎から上京して、初めて見た時の感動が「大きなビル」と連体詞表現となったと考えられる。

それに対して、11行目の「大きいビル」は、他のビルと比較してみて、相対的、客観的に「大きい」という感じであろう。

「大きな（ookina）」と「大きい（ookii）」の末尾の母音の対立で言うと[a]の方が、感動詞「ああ」に連なるイメージを持っている。この詩の冒頭にも「ああ十二時のサイレンだ、サイレンだサイレンだ」と驚きを伴った感動詞「ああ」が示されている。「サイレンだ、サイレンだサイレンだ」と三回繰り返す部分が二カ所あり、「出てくるわ、出てくるわ出てくるわ」と三回繰り返す部分が三カ所ある。「桜かな、桜かな桜かな」も三回繰り返している。この繰り返しが臨場感を醸し出すリズムとなっている。ここでは、同じ語を三回繰り返すのを特徴としている詩を「三唱りフレイク詩」と名付けておきたい。

最終行の「空吹く風にサイレンは、響き響きて消えてゆくかな」との表現は、果たして作者の視点はどこにあるかと考えさせられる。詩の冒頭の場面からの距離をとりながら「ズームバック」あるいは「ズームアウト」しているとも考えられる。そうすることにより近景にいた「月給取り」が遠景となり、「蟻の群れ」のように小っちゃく見えるのかもしれない。（注1）



図1. 「正午・丸ビル風景」（石井昭影絵）

## 2-2. タイトルに「大きな」「大きい」「小さな」「小さい」のつく金子みすゞ作品

連体詞「大きな」がタイトルにつく金子みすゞの作品は次の3点である。( )内に、『新装版・金子みすゞ全集』(JULA出版)の巻数を示す。本文中の／は改行されていることを示す。

「大きな文字」(全集Ⅰ)「大きな手籠」(全集Ⅲ) ➡本文「手籠、手籠、大きな手籠。」

➡「手籠」を三回繰り返していることから「三唱リフレイン詩」と言える。

「大きなお風呂」(全集Ⅲ) ➡本文「とても大きな／大きなお風呂。／大きなお風呂、／すてきなお風呂。」 ➡「大きな」と「お風呂」の「三唱リフレイン詩」となっている。

連体詞「小さな」がタイトルにつく金子みすゞの作品は次の4点あるのに対して、イ形容詞「小さい」がつくのは、以下に示す1点のみである。

「小さなうたがひ」(全集Ⅰ)「小さな朝顔」(全集Ⅱ)「小さなお墓」(全集Ⅲ)

「ちひさなお里」(全集Ⅲ) ➡本文「巨きな室がさむいとき、／巨きな猫がこはいとき、」

「小さい女の子と男の子」(全集Ⅲ)

タイトルに「大きな」「大きい」「小さな」「小さい」がつくわけではないが、本文中で「大きい」「ちひさい」が問題にされている作品に「こころ」(全集Ⅲ)がある。(注2)

➡本文「お母さまは／大人で大きいけれど。／お母さまの／おこころはちひさい。／だって、お母さまはいひました、／ちひさい私でいっぱいだって。」

以上、みすゞの作品は、「ちひさな」「ちひさい」「うたがひ」「こはい」「いひました」など旧仮名づかいで書かれている。

## 2-3. タイトルに「大きな」「大きい」「小さな」「小さい」のつく中也の作品

同じ山口県出身の金子みすゞと中原中也を対比させるために、タイトルに「大きな」「大きい」「小さな」「小さい」のつく中也の作品を調べてみたが、結果はゼロであった。

『金子みすゞ全集』には、512篇の詩が掲載されているが、その中にタイトルに含まれる「大きな」(3)「大きい」(0)「小さな」(4)「小さい」(1)と合計8篇あるのに対して、中也の作品では、ゼロであったというのは大きな差異と言える。

中原中也の作品数は、350篇ほどと言われている。翻訳作品や未発表作品を含めて612篇という数え方もできるだろう。タイトルに「大きな」「大きい」が含まれているわけではないが、未発表作品の中の童話「夜汽車の食堂」(1934-1935推定)には、次のような記述がある。

「大きなお月様がポッカリ出ていました。(中略) そのレールの上を、今、円筒形の途方もなく大きい列車が、まるで星に向かって放たれたロケットのように、遮二無二走って行くのでした。(中略) 白い大きいゾーレをかぶり、青い洋服に薄い焦茶のストッキングをはいた、大きなアメリカの小母さんが這入ってきました」(傍線筆者、底本『新編中原中也全集 第四巻 評論・小説』角川書店2003、同作品は、『青空文庫』(作品ID 55934)でも公開されている)

「大きなお月様」は、一つしかない「お月様」を作者の主観によって表現したものだが、「大きい列車」の方は、具体的に他の列車と比べて客観的に「大きい」と言えるものである。

「大きいゾーレ」(ベレー帽)と「大きなアメリカの小母さん」は、一文の中に「大きい」と「大きな」を対比させている。中也にとっては、無意識な使い分けだったかもしれないが、相対的にサイズが「大きい」ベレー帽と図体そのものが「大きな」小母さんの対比で、「僕は怖くなっ

て、とてもそのアメリカの小母さんの顔が見てはみられなくなって…」と恐怖まで感じるのがある。原稿用紙二枚の草稿が現存しているが、短い作品の中に二回も「大きい」と「大きな」を対比させている作品は、中也には珍しいと言えるだろう。

宮沢賢治の童話に触発された作品と言われているが、1934（昭和9）年に、文也が誕生し、我が子に読んで聞かせようと中也が童話「夜汽車の食堂」（1934-1935推定）を書いたとも考えられる。未発表作品であるが、我が子のためなら発表しなくてもいいと考えたのかもしれない。子どもの心を詠う童謡詩を書いた金子みすゞの世界への接近と見てもいいだろう。

ただし、みすゞとの違いは「僕はお母さんや父さんを離れて、かうして一人でお星の方へ旅することが、なんだか途方もなくつまらなくなるのでありました」と中也が星の世界への旅に興味と関心が薄い点であろう。逆にみすゞは、以下に示すように「星の世界」への関心が高い。

### 3. 金子みすゞ『キネマの街』リレー朗読会（2023年10月28日・大殿地域交流センター）

『金子みすゞ童謡絵本・キネマの街』（2001）は、山口県下関市を舞台にしたと思われるみすゞの詩15篇に深沢邦朗（1923-2009）が絵を描いてJULA出版局より出版された。512篇に及ぶ金子みすゞの童謡の中から、矢崎節夫が15篇を選んで絵本にした。現実と幻想の間を行き来するようなみすゞのイメージーションの世界が、可視化されたような絵本である。深沢邦朗が、みすゞが生きた頃の情景を再構成しながら、想像をふくらませ、大人にも子供にも興味と関心を抱かせるような場面を描いている。その15篇の中に表2に示す「山の子浜の子」が収録されている。

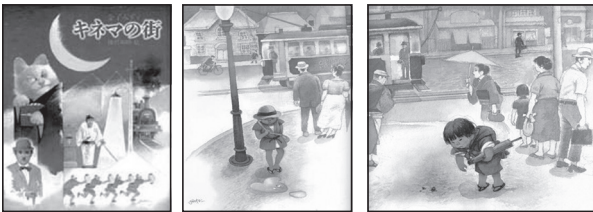


図2. 『キネマの街』表紙と「山の子浜の子」

「山の子浜の子」は、田舎の「山の子」と「浜の子」が都会を見に来た様子を対比させている。「田舎」と「都会」の対比構造の中に、「山の子」と「浜の子」の視点のさらなる対比がある。

表2. 山の子浜の子（『金子みすゞ・キネマの街』より）

電 車 ど お り の 水 た ま り 、 底 の き れ い な 青 空 に 、 さ み し い 昼 の 月 の よ に 、 鱗 が う か ん で 居 り ま し た 。	町 を 見 て き た 浜 の 子 よ 、 町 に は 何 が あ り ま し た 。	町 を 見 て き た 山 の 子 よ 、 町 に は 何 が あ り ま し た 。	山 の 子 浜 の 子  町 を 見 て き た 山 の 子 よ 、 町 に は 何 が あ り ま し た 。	「山の子」は、路上にこぼれた「菜莢（ぐみ）」を見つけ、「浜の子」は水たまりにうかぶ「鱗（うろこ）」を見つけた。その水たまりに浮かぶ「鱗」が第四連の三行目「さみしい昼の月」と比喻され
--	--	--	--	--

ている。ところが、朗読テキストとして見直している際に「さみしい昼の月」ではなく「さみしい昼の星」ではないかとの疑問が山口智子氏から出された。『キネマの街』の中の「山の子浜の子」だけが「昼の月」となっているが、他のみすゞ詩集は「昼の星」となっている。

### 3-1. 「昼の月」擁護論

みすゞ自身が「星とたんぼぼ」という詩の中で「青いお空の底深く、海の小石のそのやうに、夜がくるまで沈んで、晝のお星は目に見えぬ。見えぬけれどもあるんだよ、見えぬけれどもあるんだよ。」(句読点で改行)としており、見えないはずの「昼の星」を比喩とするのは、いかがなものか。単なる誤字(誤植)と片付けていいものだろうか。山口の朗読屋さんメンバーの内藤充子氏から、次のような「山の子浜の子」についての解釈が示された。

「鱗の形を思うと月も想像できるな～って思っていました。昼の月は、白く透ける感じで、空は明るいけど仲間の星は見えず、寂しく感じて…。透き通った鱗も水たまりに寂しそう…」

福田百合子先生からも「昼の月」擁護論に賛同する旨が、リレー朗読会の席で示された。

長門の仙崎港近くで育った浜の子のみすゞにとって水たまりにうかぶ魚の「鱗」が満月前後の少し欠けている月に見えても不思議はないだろう。

次の表3に示す「昼の月」と題するみすゞの詩もある。

表3. 「昼の月」(金子みすゞ)

『金子みすゞ童謡全集 (普及版)』JULA出版 局(二〇二二)より	行つてあげないの。 なぜなぜ お月さま、 白いおひるの 旅びとが、 暗い、暗いと いつてましょ。	いまごろ どつかのお国では、 砂漠をわたる 暗い、暗いと いつてましょ。	お月さま。 風吹きや、消えそな お月さま。	しゃぼん玉みたいな お月さま、 お月さま。	昼の月 金子みすゞ
---	--	--	-----------------------------	-----------------------------	--------------

私見では、もし水溜りに浮かんでいる鱗が複数ならば、星の可能性はあるが、一つであれば月ではないかと考えた。深沢邦朗の絵では、水たまりに鱗が二枚浮かんでいるように見える。

### 3-2. 「昼の星」擁護論

JULA出版局の『新装版 金子みすゞ全集・Ⅲ さみしい王女』(1984)では「晝の星」となっており、同じくJULA出版局の『金子みすゞ童謡集・明るいほうへ』(1995)でも「昼の星」となっている。「晝」と「昼」という新旧漢字表記の違いはあるが、「星」という点では一致している。他の詩集も、「昼の星」となっており「昼の月」は誤植ではないかと思われた。

みすゞは「昼の星」は「見えぬけれどもあるんだよ」としており、認識されていない星のさびしさを表現しているのではないか。みすゞの「見えぬもの」への視点を「浜の子」が持っていたとすると、あえて「さみしい昼の星」という比喩をもって、都会の子なら見過ごしてしま

うであろう「鱗」を見つけたとも考えられる。みすゞの詩には、表4に示す「みえない星」もあり、「星の奥にも星がある。眼には見えない星がある」と肉眼では見えない先にも天体望遠鏡で見れば、さらに星があると天文学の分野にも関心を持っていたことがうかがえる。

表4. 「みえない星」(金子みすゞ)

<p>『新装版 金子みすゞ全集・Ⅲ さみしい王女』JULA出版局発行 (二九八四)より</p>	<p>みえない星 金子みすゞ</p> <p>空のおくには何がある。 空のおくには星がある。 空のおくには何がある。 星のおくには何がある。 星のおくにも星がある。 眼には見えない星がある。 みえない星はなんの星。 お供の多い王様の、 ひとりの好きなたましいと、 みんなに見られた踊り子の、 かくれていたいたましいと。</p>
---	--

上記の「みえない星」は、1行目から3行目までと6行目が一文一連となっており、それぞれ、一連・三連・五連が質問で、二文字ずつ下げて書かれている二連・四連・六連が、その答えとなっている。このQ&A形式は、先述の「山の子浜の子」と共通しており、一方的な叙述の詩形式ではなく、対話的な質疑応答形式となっている。ここでは、「問答形式詩」と名付けておきたい。内容的にも、両者の詩には、通底する要素が含まれていると思われる。

### 3-3. 「昼の月」か「昼の星」か

JULA出版局へ電話して聞いてみたところ、同詩の「昼の月」は「昼の星」の誤植であることを認めた。「第三刷りで訂正しようと思うが、残念ながら第三刷りを出す見込みは今のところない」とのことであった。

2001年7月25日の第一刷りから2004年12月21日の第二刷りに至る3年間の過程でも、誤植は見過ごされたわけで、情けないことである。

そもそもJULA出版局は、「東京都豊島区高田3-3-22」にあって電話が03-3200-7795であった。全集や詩集の奥付にも上記の電話番号が記されていて、そこへ電話をかけると「現在使われておりません。お確かめになっておかけ直してください」との音声ガイドが入るのみである。

問い合わせのために電話した者は「もしかしてJULA出版局は倒産したのではないか」と思うかもしれない。「電話番号は、見えぬけれどもあるんだよ」と思い返して、インターネットで検索してみると、JULA出版局は、「東京都文京区駒込6丁目14-9フレーベル館内」となっており、アンパンマンの出版で有名な「フレーベル館」に吸収合併または買収されてしまったのかと考えたりする。しかも「フレーベル館」のサイトを開くと取り扱い出版物に金子みすゞの詩集も入っている。

JULA出版局のサイトに戻って、記載されている番号(03-5359-6657)に電話してみると「4年前(2019年)に「豊島区高田」から「文京区駒込のフレーベル館の建物内に移転した」とのことであった。フレーベル館に吸収合併または買収されてしまったのではないとのこと。

念のため、金子みすゞ記念館(山口県長門市仙崎1308 ☎0837-26-5155)にも電話で問い合わせたところ、もともとみすゞの三冊目の手帳に「晝の星」と記されていたと草場睦弘氏に確認していただいた。「山の子浜の子」は、生前未発表の作品なので西条八十らの添削が入ったということではなく、あくまで『金子みすゞ童謡絵本・キネマの街』JULA出版局の編集段階でのミスであろうとの草場氏の判断が示された。

### 3-4. 路上にこぼれた「茱萸(ぐみ)」

金子みすゞの「田舎の絵」という詩の中にも「小舎の木かげにやぐみの木に赤いぐみの実うれてましよう。」というように「茱萸の木」と「赤い茱萸の実」が描かれている。現代の子供は、「グミ」と言えばお菓子を思い起こすであろうが、一時代前の世代は、「茱萸の木」と「赤い茱萸の実」を思い出すのではないだろうか。

グミ(胡頹子)はグミ科グミ属(学名:Elaeagnus)の植物の総称で、果実は食用になる。なお、グミは大和言葉であり、菓子のグミ(ドイツ語でゴムを意味する“Gummi”から)とは無関係である。<フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』>より

グミの果実は楕円形で赤く熟し、見た目がサクランボを楕円形に伸ばしたような形をしている。味は甘酸っぱく、渋みもある。この渋みはタンニンによるもので、完熟していないとこの渋みが強くて食べられない。

表5. 「田舎の絵」(金子みすゞ)

<p>九八四)より</p> <p>JULA出版局『新装版・金子みすゞ全集I・美しい町』(二)</p>	<p>私は田舎の絵をみます、 さびしい時は絵のなかの 白い小みちをまいます。</p> <p>向こうに見えるは水車小屋 見えないけれどあの中には やさしい番人のお爺さん。 小舎の木かげにやぐみの木に 赤いぐみの実うれてましよう。</p> <p>こっちにみえる山蔭にや ちいさな村があるので。</p> <p>田舎の絵にある小みちには たれもいません静かです。</p> <p>表にや、せわしい人、くるま それでも絵のなか静かです いつでも、しずかな日和です。</p>	<p>田舎の絵</p> <p>金子みすゞ</p>
--	--	--------------------------

表2の「山の子浜の子」には、「ぼっちりと、森の一軒家の灯のように、茱萸がこぼれておりました」とあるが、その「森の一軒家」の心象風景が、上の表5の「田舎の絵」の中の「小舎」ではないかと想わせる。「ぼっちりと」は、山口方言ではないかと思う人もいるが、『広辞苑』にも載っており、方言形ではない。「ぼっちりと」は、「1. 目をはっきりと開いているさま。ぼっちりと。2. 数量や程度が非常にわずかであるさま。『手当が一出る』」であるが、ここでは、第2の意味合いで用いられている。



#### 4. 『文芸山口』 誤植事件


『文芸山口』 第369号は、「福田百合子特集号」として発行された。1958（昭和33）年創刊以来『文芸山口』に65年関わってこられた福田百合子先生の特集号が出されたことは、誠に喜ばしいことである。ただし、表紙裏の福田百合子氏愛誦詩として掲載された中原中也の「朝の歌」の中に5カ所もの誤植があったのは、誠に残念なことである。

しかも、次の第370号には、何の謝罪文も正誤表も掲載されなかった。これでは、中原中也をはじめ福田百合子先生、購読者に対して失礼であると思われる。何もなかったかのように次号を出していくとしたら歴史と伝統ある『文芸山口』の品位と良識が疑われることとなる。

人間の仕事である以上、誤りは避けられないが、その誤りにどのように対処してゆかが問われる。今後、『文芸山口』がどのように対処するのか、疑問に思ったため同編集部宛に2023年8月1日付で公開質問状を「山口の朗読屋さん」の9名のメンバーが連名で送った。

表6. 『文芸山口—福田百合子特集号—』 目次・福田百合子氏愛誦詩「朝の歌」 中原中也

<h1 style="writing-mode: vertical-rl;">文芸山口</h1> <p style="writing-mode: vertical-rl;">第三百六十九号</p>	目 次		
	<b>福田百合子特集号</b>		
	短歌	その日 十首…………… 福田百合子 (2)	
	散文	わらびの根 (『外部の家』第2章より取録)…………… 福田百合子 (6)	
	対談	～中村桂子、内藤いづみ対談本をきっかけに～…………… 福田百合子&編 識身 (12)	
	小説	ガードレール黄瀬集 3/11 山口県萩市堀内2区指月山…………… 藤田 雄一 (34)	
		ぬいぐるみは展覧会の夢を見るか⑧…………… 砂かりん (38)	
		柿の皮…………… 矢和田高彦 (40)	
	評論	『春和の山頭火新研究』(24) 山頭火と種田酒造場～新資料「百合子」…………… 古川 富章 (43)	
	書評	画文物論絵巻 未福花…………… 樋口かずみ (61)	
	歴史探訪	戦国譚海 4-3…………… 神於 創 (68)	
	時評	一匹ネズミモノマウス-G 7 広島サミット、 原爆を世界のお偉い人はどう考える一…………… 宮崎マモル (76)	
	随筆	根野隆明記 妻 (亡悼)…………… 兼重 元 (80)	
		金子みすゞに寄せて…………… 松むらきこ (84)	
		0・0・0・1のちから (二)…………… 夏目こころ (86)	
		里山に魅せられて…………… 畑山 静枝 (88)	
		青春自画像 (その一)…………… 仁木 達雄 (94)	
	短歌	短歌五首 佐へ…………… 樋口かずみ (99)	
	詩	老人殿勢を免ぶまで アナタ…………… 小川 和生 (103)	
		不思議な夕暮れ…………… 栗 康太郎 (102)	
		今このかなしは 怒りだ…………… 國 謙生 (103)	
	小説	心模様…………… 浜崎勢津子 (106)	
		フルハーモニーコンサート 第三十回…………… はたのまゆ (115)	
		美味いのに、余る…………… 河村 和男 (117)	
		海へ帰る3…………… 國 謙生 (120)	
	…………… 宮崎マモル (128)		
山口県文芸懇話会規約 (11)	会報…………… (127)		
合評会案内…………… (33)	編集後記…………… (138)		
原稿募集…………… (37)	会員名簿…………… (139)		
作品合評…………… (133)	会員募集・奥付…………… (140)		
表紙絵 第25回新芸術展 大地が動いた 松長壽美江……………			



福田百合子氏愛誦詩 「朝の歌」 中原中也

天井に 葉きいろいで	ひろごりて たひらかな空、	ゆきいろの
戸の隙を 洩れ入る光、	土手づたひ きこえてゆくかな	
響びたる 車窓の揺ひ	うつくしき さまざまな夢、	
手にてなす なにごともなし。		
小鳥らの うたはきこえず	空は今日 はなだ色らし、	
倦んじてし 人のこころを	うしなひし さまざまなるゆめ、	
諷めする なにもものなし。	森並は 風に鳴るかな	

山口の朗読屋さんとしては、5月27日に大殿地域交流センターで、福田百合子先生をゲスト講師にお迎えして「春の朗読会」を実施した。そこでは福田百合子著『百合子のふるさと辞典』をテキストとして朗読し、福田先生に解説してもらう形の朗読会であった。その朗読会の二日ほど前に『文芸山口』第369号「福田百合子特集号」が発行されたと分かり、会員の方に頼んで10冊届けてもらった。

8月1日の公開質問状には、事務局長の藤田義隆氏より、5日付の封書による回答が8日に届いた。

それには、第371号に謝罪文と中原中也の訂正した「朝の歌」を縦書きで表紙裏に掲載する旨が、記されていた。同日夜には、藤田氏より電話もあった。ただし、訂正の「朝の歌」は、2023年2月10日付の読売新聞や毎日新聞で報じられた中也の直筆原稿を載せるというので、それは中間形で最終形ではないから、まずいのではないかと答えておいた。

山口の朗読屋さんのメンバーの金崎清子氏が『文芸山口』第369号の「朝の歌」の誤植に気づいたのは、中原中也記念館発行の『出会い？発見？！感動！！ 中也読本（第二版）』（2018）と照合して不一致の部分を見つけたことによる。

もちろん、それより先に福田先生が誤植に気づき、第369号「福田百合子特集号」を刷り直しすることを事務局に申し入れたが、財務担当からは、そのようなお金はないと突っぱねられ、険悪な雰囲気になったという。どうも事務局長の強引な手法で、特集号が企画されたようで、後日事務局の三名連名で事務局長あての抗議文が出されたと聞く。それは、特集号が完売しても、増頁し、発行部数を増やしたのでは、赤字になってしまうという内容であったらしい。

無論、「刷り直し」が望ましいのだが、それが出来ないならば、次善の策として「朝の歌」の正誤表を作成し、謝罪文とともに『文芸山口』第369号の残部に挟み込み、次の第370号に謝罪文と正誤表を掲載するという対処方法が採れたはずである。「刷り直し」が無理なら「謝罪文と正誤表」という発想へと転換できなかったのだろうか。隔月の発行なので、検討の時間がなかったとは言えないであろう。

それと「福田百合子特集号」の中には、「文芸山口」第369号合評会案内（6月18日、大殿地域交流センター）のお知らせが掲載されている。実際どのような合評会がなされたのであろうか。同号の誤植問題は、話題に上らなかったのであろうか。

確かに第371号に謝罪文と中原中也の訂正した「朝の歌」が縦書きで掲載された。

たかが誤植をとにかく言う必要はないと思うかもしれないが、一つの詩に五カ所の誤植は、単なるうっかりミス（不注意によるmistake）ではなく、むしろエラー（error）である。

表7. 正誤表より

- |                 |   |             |
|-----------------|---|-------------|
| 1. (誤) さまざまなるゆめ | ➡ | (正) さまざまのゆめ |
| 2. (誤) たひらかな空   | ➡ | (正) たひらかな空  |
| 3. (誤) さまざまな夢   | ➡ | (正) さまざまの夢  |

表7の2と3は、[名詞]の[名詞]を<形容動詞(な形容詞)+名詞>に誤入力している。

もともと「さまざまなる」は、古文で用いられる語でナリ活用の形容動詞「様々なり」の連体形である。古文の「さまざまなる」から現代文の「さまざまな」が使われるようになった。

「さまざま」だけでは、品詞は「名詞」であるが、「さまざまな」とすると品詞は形容動詞（日本語教育の方では「ナ形容詞」）となる。その対比は「自由の女神」と「自由な女神」の違いを考えれば、明らかとなる「自由の女神」の場合は、固有名詞扱いでニューヨークにある

「自由の女神像」が思い浮かぶ。「自由を守る女神」に対して「自由な女神」となると「自由に飛び跳ねる女神」や「自由な服装の女神」、「自由奔放な女神」など様々なイメージの女神が連想可能で、固定されたイメージではない。

何が最終形かは、『新編 中原中也全集』（角川書店）の「第一巻 詩I本文篇」と「第一巻 詩I 解題篇」を見るとわかる。もし、中也のほかの詩でもいくつかのバリエーションが見られたら、『新編 中原中也全集』（角川書店）を参照すればいいというのは、福田百合子先生に朗読会の折に教えていただいた。中原中也記念館の見解でもある。「第一巻 詩I 解題篇」には、「朝の歌」が第4次形態までであることが記されている。ちなみに第1次形態は、『スルヤ』第2輯（1928年5月）である。『世界音楽全集』第27巻（1932年、春秋社）に掲載されたものは、『スルヤ』の本文を転載した第1次形態異文に当たるもので、楽譜とともに横書きで掲載されている。ただし、表7の三例はみな〔名詞〕の〔名詞〕の形をとっている。

表記の「もりなみ」は、第1次形態で「森並」と表記され、第2次形態から「森竝」となっている。『山羊の歌』でも「森竝」であるが、『文芸山口』第369号では「森並」とされた。

表7の1と3のところで、第3連では「さまざまのゆめ」が第4連では「さまざまの夢」と平仮名表記から漢字表記になっている。その点、『出会い？発見？！感動！！ 中也読本（第二版）』（2018）では、欄外に次の表8のような解釈を示している。

表8. 「さまざまのゆめ」と「さまざまの夢」

「ゆめ」のほうは、「うしなひし」、つまり、失ってしまった「ゆめ」で、「夢」のほうは「うつくしき」「夢」です。「うつくしき夢」の方は、まだどんな夢だったのかを覚えている夢なので、ぱっと意味が頭に入ってくる漢字を使ったのではないのでしょうか。その夢もすぐに「きえてゆく」のですけど。

確かに、漢字の方が「ぱっと意味が頭に入ってくる」ので、漢字は仮名に比べて「意味に透明である」と言われている。「きえてゆくかな」のところも、『文芸山口』第369号では「きこえてゆくかな」と反対の意味に誤植されていた。「消えて」と「聞こえて」と漢字表記されていれば、すぐに誤植が発見されたと思われるが、気が付かなかったという読者も多い。

## 5. リレー朗読のまとめと問題点

以上見てきたようにリレー朗読する過程で、朗読テキストと同名異形態の作品や同名異詩が見つかったり、朗読テキストの誤植が見つかったりして混乱することがあった。しかし、分担した詩の文字列をひたすら読むことに専心して、作者の意図を考えながら読むことをおろそかにしていることに気づかされた。活字になったもの、本になったものに間違いがあるはずはないという思い込みは誰にでもある。同名異形態の作品や同名異詩が多い中で原文を注意深く丁寧に読むことで誤植の発見につながることもある。語学学習の現場では「誤りから学ぶ」ことが尊重される。以下に示すようにリレー朗読を通して学ぶことも多いと思われる。

表9. 『金子みすゞ・空のかあさま』リレー朗読（2023年3月25日）参加者からの声

- \*みすずの「大漁」を読ませて頂きました。光栄です。（女性・70代）
- \*新しい発見もあり、学ぶことが多々あり、充実した時間でした。（女性・50代）
- \*リレー朗読会で沢山の方の朗読がきけ、楽しみました。とてもよいお勉強いたしました。ありがとうございました。（女性・70代）
- \*何時も心をドキドキさせて参加しています。明るく前へ進みます。これからもよろしくお願ひ申し上げます（女性・80代）
- \*朗読者として参加させていただき、楽しく過ごすことができた。奥が深い。（女性・60代）

『金子みすゞ・空のかあさま』リレー朗読で一番印象に残った詩としては「わたしと小鳥とすずと」が選ばれた。小学校の国語教科書に掲載されていることもあり、広い年齢層から支持され、親しまれている詩と言えるだろう。

『金子みすゞ・空のかあさま』のリレー朗読は、2023年3月25日が初めてではなく以前にも以下のように朗読会を実施している。

▶2019年11月30日「福田百合子がみすゞを語る・朗読＋ハーブ演奏＋お話し会」＜詳細は、林（2021）「福田百合子を囲む朗読会—金子みすゞと『山口の朗読屋さん』—」参照＞同稿には『キネマの街』や詩碑を訊ねて歩く「金子みすゞ詩の小径」（1.6 km）も紹介されている。また、みすゞの「木」という「同名異詩」の詩が、二篇あり、両方朗読したと記されている。

▶2022年4月16日「金子みすゞ『空のかあさま』朗読会＋ちひろミニコンサート」＜詳細は、林（2023）「福田百合子と朗読の世界—『朗読＋お話し＋歌』のコラボ企画—」参照＞

表10. 『金子みすゞ・空のかあさま』リレー朗読へのスタッフからのコメント

- \*20編、朗読とてもスムーズに、また楽しめたと思います。皆さんのエントリー、良かったです。ご自身で選び、皆さんの前で、気分よく朗読できた朗読できた充実感がありました。みすずのものを見る視点、とても貴重で印象的でした。（女性・70代）
- \*朗読屋だけではなく、たくさんの方が参加され、それぞれの思いを込めた朗読だったので、情景が広がった感じがしました。お子様、お孫さんと一緒に参加された方がおられ、優しく和やかな雰囲気になり、みんなで楽しめたと思います。みすゞのやさしさに包まれた2時間でした。（女性・60代）
- \*参加型のリレー朗読会は、満足感が大きいと思います。ひとりではなく、ひとりに一つか二つの詩でよいと思います。読んだあと、一言感想があれば、楽しくなるかと…。（女性・70代）
- \*一般参加の方も練習に参加され、見事な朗読をなさった。会員として、反省、勉強せねば…。同じ詩の複数での朗読を聞くのも考えさせられ、勉強になった。（女性・80代）
- \*福田先生と子どもさんが、一緒に朗読されたのが、とても良かったです。リレー朗読された方は堂々とされて、とても良かったです。（女性・70代）

- \* 初めて人前で朗読された方、家で猛練習をされたのか、教室へ来られた時より、上手でびっくりしました。私達にもいい刺激になり、しっかりと練習しないといけないと思いました。また、来られた方の中から、私もちょっと朗読してみようかと思う人が出てくるといいですね!! (女性・60代)
- \* 会員、参加者さんと色々な方の朗読が聞け、面白かった。同じ詩でも、読む人によって、詩に対する自分のイメージが変わった。勉強になったし、イベントのレベルが高まった気がした。素晴らしい。(女性・60代)

金子みすゞの詩には、以下に示すように創作時期も内容も異なる同名異形態の詩がある。( )内は、JULA出版局発行／フレーベル館発売『金子みすゞ童謡全集』(2022)の中の掲載ページ数を示す。

「木」(57/206)「雲」(13/188)「くれがた」(96/418)「さよなら」(132/257)

「はつ秋」(39/325)「花火」(136/158)「夕顔」(28/185) 以上、7組14詩

全512篇中の7組14詩が同名異詩というのみすゞに特徴的と言えるだろう。これまであまり同名異詩の作品が注目されてこなかったのは、『新装版 金子みすゞ全集』JULA出版局(1984)の三巻本に総索引が付いておらず、同名異詩の確認がしにくかったこともあるだろう。

『金子みすゞ童謡全集(普及版)』JULA出版局(2022)は、一卷本で総索引があり、同名異詩やキーワードを共有する詩を探しやすいと言える。リレー朗読の際に詩のタイトルだけで分担保すと別の詩集から同名異詩の作品を持ってくる人がいる。

中にも「同名異詩」の作品は、多数存在する。「朝」というタイトルの詩が3篇、「倦怠」が3篇、「夏」が4篇、「無題」も4篇(他に実際に題がついていない作品も多い)である。翻訳詩以外の2篇ずつ存在する「同名異詩」の作品としては、「秋の日」「蛙声」「いちぢくの葉」「幻想」「木蔭」「湖上」「酒場にて」「寒い夜の自画像」「死別の翌日」「月」「修道山夜曲」「夏と私」「夏の夜」「初夏」「四行詩」の15組30篇を数える。

みすゞよりも倍以上の数であるが、朗読上あまり問題にならないのは、一方または両方が未発表詩篇であることが多いためであろう。

## 6. 中原中也と金子みすゞの読者対象

2020年2月14日から2021年2月14日まで、中原中也記念館で第17回テーマ展示として「教科書で読んだ中也の詩一思い出の一篇」が実施されていた。定番教材としては、「一つのメルヘン」「月夜の浜辺」「サーカス」「よこれっちまった悲しみに…」「北の湖」「骨」などで、中学校・高等学校の国語教科書に掲載されることが多いとしている。(『中原中也記念館・館報2020・第25号』参照)

一方金子みすゞの詩は、小学校の国語教科書に掲載されている。「わたしと小鳥とすずと」(小三)「不思議」(小四)などである。みすゞは小学生に、中也は中学生・高校生に振り分けられているようである。本稿のタイトルに「大きな」「大きい」「小さな」「小さい」が付くか付かないかでも、学校教育での振り分けはうなづける点である。

ただし、小学生でも分かる中也の詩もあるし、大人でも味わえるみすゞの詩も多い。

表11. 金子みすゞ『キネマの街』リレー朗読会（2023年10月28日）のアンケートより

- \* みすゞの詩も巾が広いのに驚かされます！ 幼い子供向けの詩もあれば、童謡の形をとった大人の心をひきつける詩も多いのに引き付けられます。（男性・80代）
- \* 金子みすゞの詩は、いつ読んでも気持ちが落ち着き、ホッコリします。（女性・60代）

10月28日の金子みすゞ『キネマの街』リレー朗読会では、スタッフ以外にエントリーした人が朗読した「花屋の爺さん」が一番印象に残った作品として選ばれた。

金子みすゞ『キネマの街』リレー朗読は、2023年10月28日が初めてではなく、以前にも以下のような朗読会を実施している。

2022年7月23日「金子みすゞ『キネマの街』朗読会+ちひろミニコンサート」（会場は、クリエイティブ・スペース赤れんが）＜詳細は、林（2023）参照＞

2023年10月1日「金子みすゞ『キネマの街』朗読会」（会場は、ルルサス防府2階多目的ホール）＜県民活動フェスタin防府2023の一環として防府商工高等学校の高校生6人と山口の朗読屋さん5人とのリレー朗読、主催は「やまぐち県民活動推進実行委員会」＞ 下が当日の写真



2023年10月11日「金子みすゞ『キネマの街』朗読ほか」（会場は、下松老人福祉会館、主催は「玉鶴大学」）

表12. 中原中也の『よごれちまった悲しみに…』リレー朗読会（2023年4月22日）

- \* 「頑是ない歌」は、「中也君、君も男だな」という感じ。（性別無記入・80代）
- \* 複数人が一つの詩を朗読するのが、ためになった。（男性・70代）
- \* 中原中也の詩は、理解しがたい部分がありましたが、朗読のおかげで多少わかったような気がします。（女性・80代）
- \* 外国人の参加よかったですと思います。（女性・80代）
- \* 公開練習会に比べ、すごくうまくなられた方がいらっちゃって、やはりみんなの前で、練習することの大切さを感じました。皆さん、その時指摘されたことをほとんどの方が、克服されていてすばらしいと思いました。「夏の日之歌」を朗読された方は、ちゃんと詩を

覚えていらっしやって、とても聞きやすかったです。やはり自分のものとしている方の朗読は、自分の中にもすっと入ってきます。(性別・年齢無記入)

\*読み手によって詩の伝わり方が、全くちがってくるのが、おもしろいと思った。自己を客体視することが、やはり重要ですね。(男性・50代)

\*表現するという詩の朗読。それぞれの音として、楽しく聞きました。(女性・70代)

\*初めての参加でしたが、ほとんどの詩が印象に残りました。(性別・年齢無記入)

\*地元において、中也の詩に興味がありませんでしたが、リレー朗読会で関心がわきました。ありがとうございました。(性別・年齢無記入)

中原中也のリレー朗読会(2023年4月22日)では、「サーカス」が一番印象に残った作品として選ばれた。次に「よごれっちまった悲しみに…」と「曇天」がそれに続いた。

中原中也の『よごれっちまった悲しみに…』リレー朗読会は、2023年4月22日が初めてではなく、以前にも以下のような朗読会を実施している。

2019年1月13日と2月24日の二回に分けて「福田百合子が中也を語る―百合子先生を囲む中原中也詩の朗読+お話し会」が実施された。(会場は、山口県立図書館1研修室)＜詳細は、林(2020)「朗読会の可能性を考える―ボランティア・グループ『山口の朗読屋さん』の視点から」参照＞

中原中也の研究に関しては、『新編・中原中也全集』(全5巻「解題編」「別巻」も入れると全10冊、2000～2005)と充実しており、手書き原稿など新資料が発見された場合には「別巻」に追加して、更新が可能な体制になっている。そのほか、中原中也記念館発行の『中原中也研究』や『中原中也記念館館報』の発行など丁寧な展示、研究体制が整っている。

一方、金子みすゞに関しては、『新装版 金子みすゞ全集』(全3巻+『金子みすゞノート』矢崎節夫)JULA出版局(1984)が底本となっているが、みすゞが手帳に記した512篇の詩の枠を頑なに守るあまり、それから漏れた雑誌投稿作品が軽視されている。『金子みすゞノート』にも512篇の詩以外に3篇の詩が雑誌投稿されていることが記されている。それを加えると515編になるはずである。『金子みすゞ童謡全集(普及版)』JULA出版局(2022)が最新資料と言えるだろうが、「普及版」とは別に「解題編」や「研究篇」の作成が望まれるところである。

(注1) 2021年4月14日から7月25日まで、中原中也記念館での企画展で「中也。この一篇―「正午」>を実施している。展示された「正午」は、第一形態<『文學界』1937(昭和12)年>の方であった。ちなみにYouTubeで池田誠学芸員の朗読と解説を聴くことができる。「小っちゃい」は「小さい」の音変化したものであるが、「幼児語」に分類されることもある。

(注2) 林伸一・重松恵子・二宮喜代子・曲志強・石田孝子らは「金子みすゞの『こころ』をめぐる」と題して、助詞の「で」の多機能性について考察している。また「こころ」についての日本語レベルをチェックしており、「大きい」「小さい」は、『日本語能力試験出題基準』(1994)によると漢字・語彙ともに当時最下級の4級であることを確認している。<全国語学教育学会『山口支部研究紀要』第5号(1999: pp.39-59)参照>

## 【参考文献】

- 金子みすゞ著（1984）『新装版 金子みすゞ全集・Ⅲ さみしい王女』JULA出版局
- 金子みすゞ著（1995）『金子みすゞ童謡集・明るいはうへ』JULA出版局
- 金子みすゞ著／深沢邦朗絵（2001）『金子みすゞ童謡絵本・キネマの街』JULA出版局
- 金子みすゞ著／矢崎節夫監修（2022）『金子みすゞ童謡全集（普及版）』JULA出版局
- 中原中也著／石井昭・影絵／福田百合子監修（1998）『中原中也・汚れっちまった悲しみに…』  
新日本教育図書
- 中原中也著／大岡昇平・佐々木幹朗ら編集（2000）『新編・中原中也全集（第一巻）詩Ⅰ・本文編』  
『新編・中原中也全集（第一巻）詩Ⅰ・解題編』角川書店
- 中原中也著／大岡昇平・佐々木幹朗ら編集（2003）『新編・中原中也全集（第四巻）評論・小説本文編』  
『新編・中原中也全集（第四巻）評論・小説解題編』角川書店
- 中原中也記念館編（2018）『出会い？発見？！感動!! 中也読本（第二版）』中原中也記念館
- 中原中也記念館編（2020）『中原中也記念館・館報2020・第25号』中原中也記念館
- 林伸一・重松恵子・二宮喜代子・曲志强・石田孝子（1999）「金子みすゞの『ころ』をめぐる」  
全国語学教育学会発行『山口支部研究紀要』第5号pp.39-59
- 林伸一（2020）「朗読会の可能性を考えるーボランティア・グループ『山口の朗読屋さん』の視点から」  
山口大学人文学部国語国文学会発行『山口国文』第43号pp.132-146
- 林伸一（2021）「福田百合子を囲む朗読会ー金子みすゞと『山口の朗読屋さん』ー」  
山口大学人文学部国語国文学会発行『山口国文』第44号pp.14-30
- 林伸一（2023）「福田百合子と朗読の世界ー『朗読＋お話＋歌』のコラボ企画ー」  
山口大学人文学部国語国文学会発行『山口国文』第46号pp.60-76
- 山口県文芸懇話会編（2023）『文芸山口』第369号「福田百合子特集号」
- 山口県文芸懇話会編（2023）『文芸山口』第371号

## 【謝辞】

「こどもと本のジョイントネット21・山口」のブログを制作している山口智子さんには、毎回朗読会の告知をしてくださっているだけでなく、この度は、朗読テキストと同名異形態の作品や同名異詩、朗読テキスト自体の誤植の発見に貢献していただいた。多くの図書館書籍を調べてくださるなど頭の下がるような点検をしていただき、情報提供してくださったことに深く感謝いたします。

山口の朗読屋さんさんの朗読会にゲスト・コメンテーターとして参加していただいている福田百合子先生（中原中也記念館名誉館長）には、深く広い専門的な知見を披露してくださるだけでなく、本稿の草稿段階でのアドバイスもいただいた。また、中原中也記念館の池田誠学芸員には、本稿の不備を指摘していただき、心より感謝しております。

さらに内藤充子氏、金崎清子氏をはじめ山口の朗読屋さんさんのメンバーには、朗読練習の合間に本稿の内容の検討をお願いして、様々なご意見やアイデアを提供していただいた。この場をお借りして、感謝の意を表したい。

（はやし・しんいち）